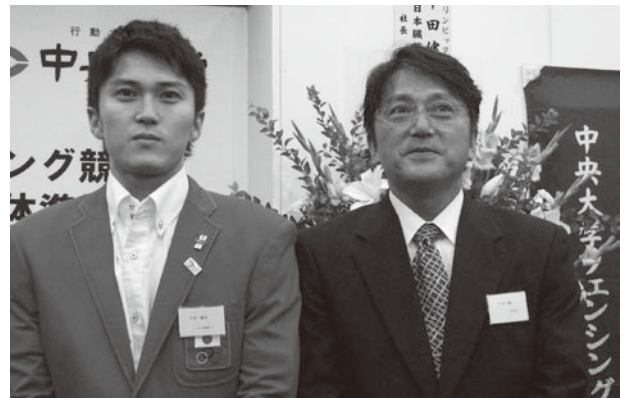




銀メダル 獲ったとお

ロンドン五輪
フェンシング男子フルーレ団体
銀メダリスト
千田 健太選手

ロンドン五輪フェンシング男子フルーレ団体で銀メダルを獲得した千田健太(ちだ・けんた)選手=2009年文学部卒業、ネクサス所属=が念願のメダルを首から下げて中大に帰ってきた(9月20日夜、中央大学駿河台記念館)



父・健一さんと

祝勝会



日本フェンシング界で史上初の団体種目メダル獲得だ。中大フェンシング部にとっても史上初のメダルである。同部は関係者への案内に「ロンドンオリンピック報告会兼祝勝会」と銘打った。祝勝会に万感の気持ちがこめられている。

日本選手団着用の「赤のブレザーと白のズボン」の制服を着た千田選手が壇上に立つと、大きな拍手と歓声が上がった。

「高校時代はインターハイで個人3位とパッとしない成績でしたが、中央大学に入学したことが僕にとって大きなターニングポイントになりました」

在学中、前回の北京五輪にも出場。個人フルーレに出場したが2回戦敗退と悔しい思いをした。「中央大学に来ていなかったら、今この場に立っていなかったかもしれません。与えられた環境を活かしてこれからも頑張っていきたいと思います」と今後の意気込みを語った。

懇親会に入ると、メダリストを囲んでの記念撮影が会場のあちこちで行われ、人気者の千田選手は食事のままならないほどであった。

父・千田健一さん(1984年卒、モスクワ五輪代表)=宮城県本吉響高校校長=が登壇する場面もあり、「中央大学

に息子を入れてよかった」とメダリストを隣に立たせて誇らしげに語った。健一さんも中央大学フェンシング部の卒業生だ。1980年モスクワ五輪の代表選手であったが、日本がボイコットをしたため、五輪には参加できなかった。あの無念さはこの夜、晴れたのだろうか。健一さんが満面の笑みで話す姿を見て、千田選手がメダルを獲得したことはこれ以上ない親孝行なのではないかと記者は思った。

千田選手の活躍で メダル獲得



今回、監督を務めた岡崎直人監督(1992年卒、2000年シドニー五輪代表)と江村宏二コーチ(1984年卒、1988年ソウル五輪代表)が相次いでマイクを握った。



岡崎監督は「初戦の中国戦、準決勝のドイツ戦で活躍したのは、実は千田選手であることを皆様には理解していただきたい」と訴えると、会場からは「そうだ」と賛同の声が上がった。

久野修慈理事長(学会会長)はあいさつで「メダルを獲得したことによって、気仙沼に本当の意味での復興の旗があがったのではないかと東日本大震災で被災した千田選手の地元、宮城県気仙沼市を気遣った。続いて福原紀彦総長・学長が「中央大学のユ



福原総長・学長と

ニバーシティーメッセージ『行動する知性。』を千田選手が見せてくれた」とその健闘をたたえた。

千田選手は、大会を控えた現役学生を前にして「大会が続きますが一試合、一試合、ワンチャンスだと思って頑張ってください」と応援の言葉をかけた。

その後、全員で校歌と応援歌を大合唱して会は幕を閉じた。

(学生記者 荻原睦=法学部4年)

フェンシングでのメダル

2008年北京大会で、太田雄貴選手が個人フルーレで銀メダルを獲得した。

大喜びのOB諸氏

「報告会兼祝勝会」には全国から約70人が出席。OBの多くは食事をそっこのけにして、あちらこちらで旧友との思い出話に花を咲かせた。「千田選手が銀メダルを獲得したことによって、卒業以来の再会を果たした。ありがとう」と感涙しながら話す大先輩がいた。司会者の声も耳に入らないほど歓談は盛り上がり、主役以上の笑顔を見せていた。



世界で勝つ

江村コーチの話
現役学生に向けて「世界で勝っていききたいという思いを持って練習に取り組んでほしい」と期待を込めた。

取材用スリッパを忘れた記者に、 そっと差し出してくれた優しい剣士

～中スポ元記者が見た学生時代の千田選手～

「中スポ」の学生記者として駆け出しのころ、東京・駒沢屋内球技場での取材にうっかり室内履きを忘れてしまった筆者に、そっとスリッパを貸してくださったのが千田選手だった。

当時15人ほどのフェンシング部の中では少し寡黙な部員。決して多くは語らぬその言葉の一つひとつに、ひたむきさや優しい人柄を垣間見ていたことを思い出す。

強豪として知られる中大フェンシング部に千田選手が所属した当時、部にはエペの坂本圭右氏、谷川誠亮氏、サーブルの坂本雄右氏、工藤伸也氏らフルーレの千田選手以外にも各種目の精鋭が集っていた。

3種目とも、目指すは頂点。「勝つのが当然」「準優勝では意味がない、優

「中大スポーツ」新聞部元記者
柴田 愛(中央大学文学部2009年卒業)

勝しなければ」。部員や戸田壮介監督(当時)の言葉からもその格の違いが窺い知れた。

上級生を抑えて優勝



千田選手を取り巻く環境は多くの刺激を与えていたに違いない。2年次の2005年には、関東学生選手権(関カレ)男子フルーレ個人で初優勝を飾る。上級生を抑えて成し遂げた快挙。中大フルーレの主軸として貢献した実力派は早くからその存在感を光らせていた。





戦いの場は春の関東学生リーグ戦に始まり、夏の全日本学生王座決定戦、秋の関カレ、インカレ、そして冬の実業団選手をまじえた全日本選手権大会と続く。その合間に海外遠征という競技生活。国内大会に上手く調子を合わせなければいけない難しさがあつた。

多忙を心配する記者陣にインタビューで見せた控えめな笑顔が臉に浮

かぶ。中大屈指のエースでありながら驕ることはなく、ピスト(競技テーブル)の上で繰り広げるキレのある剣さばきの一方、低学年次は下級生として黙々と雑務をこなしていた姿もまた印象深い。「真面目」「堅実」という言葉がよく似合う剣士だった。

ロンドンの大舞台で果敢に戦う姿、その強い眼差しに、フィールドが変わっても

変わらぬ“剣士・千田健太”を見た。

かつてピストの目前まで追った勇姿。今はテレビ画面の前、一眼レフも取材ノートもないけれど。あのころと同じようにエールを送り続けたい。



激闘 VTR



【フェンシング男子フルーレ団体】

試合結果

準々決勝 中国 ○45-30

準決勝 ドイツ ○41-40

決勝 イタリア ●39-45

※団体戦は双方3選手ずつ総当たりで戦い、9試合までに45点先取するか、得点が多いほうのチームが勝つ。

【評】団体には日本から4選手が出場した。千田選手(27)のほか太田雄貴(26)=同志社大卒、森永製菓=、淡路卓(23)=日大卒、ネクサス=、三宅諒(21)=慶大=の3選手だ。

準々決勝で中国に快勝し、準決勝ではドイツに苦しめられた。太田選手が劣

勢の残り1秒から同点とし、延長戦ではビデオ判定の末に、ポイントが認められた。決勝進出、イタリアとの対決が決まると喜びの輪がいくつもできた。

ポイントは、初戦となる中国との準々決勝だった。中国は世界ランク2位。対する日本は同7位。開始早々、千田選手は中国のこの種目個人金メダルの雷声選手から5-4とリードを奪い、チームを活気づけた。10-10からの2巡目では、個人8位の馬剣飛選手から7連続を含む10点を奪い、リードを7点に広げた。千田選手の活躍で日本チームは波に乗った。

■フェンシングってどんな意味？

柵や塀を意味するフェンスが語源で、中世の騎士たちが身を守る、名誉を守るといった意味から「フェンシング」が競技名となった。千田選手が出場した種目の「フルーレ」とはフランス語で「花」のこと。剣先が危険なため練習では一時、剣の先に危険防止のため綿などを付けていて、その形が花に見えたとか。剣が茎で花がその上にある…。



用語説明

■フルーレ

「攻撃権」を尊重する種目。剣を持って向かい合った両選手のうち、先に腕を伸ばし剣先を相手に向けた方に「攻撃権」が生じる。相手がその剣を払ったり叩いたりして、向けられた剣先を逸らせる、間合いを切って逃げ切るなどすると、「攻撃権」が消滅し、逆に相手が「攻撃権(反撃)」を得ることになる。このように攻撃-防御-反撃-再反撃-といった瞬時の技と動作の応酬(剣のやりとり)がこの種目の見どころだ。フルーレの有効面は胴体のみ(背中を含む)。

■エベ

全身すべてが有効面で、先に突いた方にポイントが入り、両者同時に突いた場合は双方のポイントとなる。ランプの点灯に注目していれば、どちらの選手がポイントを挙げたか判断できるので最も分かりやすい種目といえる。

■サーブル

フルーレとエベが「突き」だけであるのに対し、サーブルには「斬り(カット)」と「突き」がある。「斬り」の技が加わることでよりダイナミックな攻防となる。有効面は上半身のみ。

(参考・日本フェンシング協会HP)

